

「研修会等名称」

自閉症カンファレンス NIPPON2014

場所：早稲田大学

期間：8/23-24

1. 研修の内容

教育や福祉現場で、今日本でもっとも成果を上げている、TEACCH のプログラムについて、TEACCH を開発したノースカロライナ大学からスタッフが来て、最新の研究内容が紹介されると共に、日本国内でのさまざまな現場の取り組みが紹介されるカンファレンスであった。私自身、初めての参加となった。

とりわけ、ゲーリー・メジボフ教授による、大学生に対する具体的な支援の紹介は、今回の研修にとっての目玉となった。

大学生に対する、最初の履修登録期間における手厚いサポート、ノートテーキングサポート、レポートや試験を受ける独自の環境の保証や時間の延長、各教員との間を埋めるパーソナルサポート(学生がリクルートできれば好ましい)などは、具体的に参考となった。

TEACCH プログラムは、自閉症のハンディを取り除くために、構造化、スケジュール化、視覚化のメソッドを用いており、方法主義のイメージを持っていたのだが、その理念のもう一方の柱に、個別化という方法があるため、むしろ、硬直した方法ではなく、関わる人が本人とコミュニケーションしながら開発していく実践を紹介しており、目から鱗だった。つまり、TEACCH が方法主義に対し、最近、TEACCH 批判としてのコミュニケーション主義の別の自閉症ケアが叫ばれているのだが、TEACCH 自体、コミュニケーション主義だったことが、カンファレンスに出ることで確認できた。

また、障害が持つ異なる文化に対する敬意と理解の発想は、ヒューマニズムに基づいており、専門家がケアにあたる考え方ではなく、親を治療のパートナーとして引きずりこむ発想も、コミュニティを構築していく発想として、参考になることが多かった。

一方、アメリカの大学では寮生活が多く、寮での一人の生活に対するケアの必要性や、不適切な行動に対する懲罰委員会でのアドボカシーの権利の弱さなど、アメリカ固有の状況も確認した。とはいえ、日本でも、発達障害の学生による性暴力の事例などが出ない可能性はないとはいえ、アメリカの事例に学ぶことの必要性も感じた。

2. 研修の成果

文学部では、近年、発達障害の学生が増えてきている。とりわけ、行動的な学生の場合は、それによって授業が成立しなかったり、サークルの人間関係を壊す事例もある。また、発達障害が大学に入ってから発見されたり、レポートが限られた時間で書けなくて、単位修得ができない学生の事例もある。私のゼミの学生にも、IQは130と高いのに、卒業できなかった事例があった。

また、文学部の教学委員就任時には、こういった学生のなかで、各授業の教員への要望がうまく言えないケースについて、学生と各教員の間に入って、授業のやり方について工夫してもらいをお願いなどをしてきた。

ただ、学生相談室においても、実際にスクールソーシャルワーカー的に、彼らの勉学をサポートする方法などについては知識や経験を持っていないこともあり、いつも手探りで悩んできたのも事実であった。

今回の研修は、そんな現状に対し、アメリカでの実際の事例を参照でき、また考え方の基本を掴むことで、本学でもよりよい方法を取ったり環境を工夫する可能性が出てきたと思われる。

3. 授業への研修成果の反映状況

本年度、文学部では、発達障害の学生に対する対処について、他大学でのケースを他大学の教員に話していただく研修を企画している。その研修の企画においても、実施においても、より充実したものが可能となると思われる。またFD委員、教学委員、学生委員などが協力して、文学部の発達障害の学生に対して具体的な取り組みの端緒となればと考える。

学部長	FD委員長	FD委員会	名古屋教務課長	係